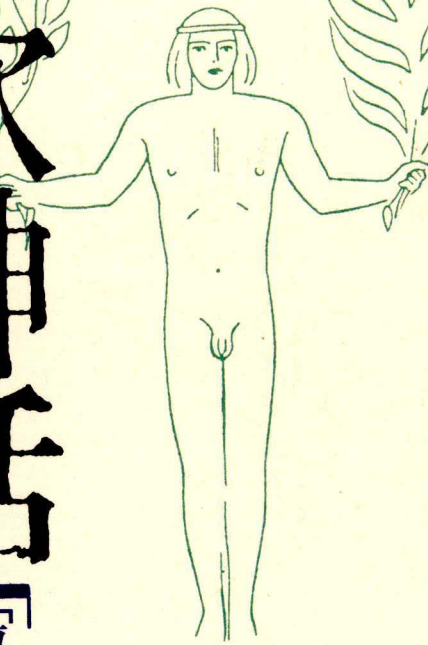


宇宙論の基礎構造

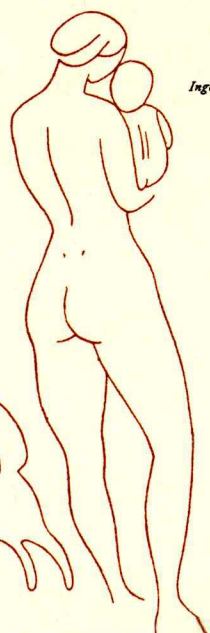
北欧神話

「巫女の予言」
の秘文を解く

det bedste vinder,
Balder kommer



Ingen saar, men Sæden vokser



尾崎和彦 著

明治大学人文科学研究所叢書

白凰社

尾崎和彦
著

明治大学人文科学研究所叢書

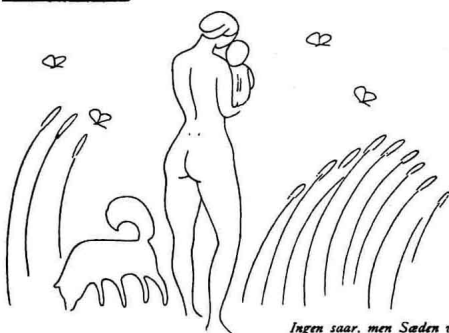
白鳳社

北歐神話の基礎構造

「巫女の予言」
の秘文を解く



det bedste vinder.
Balder kommer



Ingen saar, men Sæden vokser

《著者略歴》

尾崎和彦（おざき・かずひこ）

1936年、岡山県生まれ。京都大学大学院博士課程修了、宗教哲学専攻。コペンハーゲン大学、ミュンヘン大学、デュウビンゲン大学留学を経て、1977年、明治大学政治経済学部教授。1989年、コペンハーゲン大学・ウブサラ大学客員研究員。

著書 『北欧思想の水脈—単独者・福祉・信仰-知論争—』（世界書院）。

訳書 ヨハネス・スレーク『実存主義』（法律文化社）、パトリック・マスターソン『無神論と疎外』（法律文化社）、セーレン・キェルケゴール『野の百合と空の鳥』飯島宗享編『キェルケゴールの講話・遺稿集』第3巻所収（新生書房）、セーレン・キェルケゴール『愛の業』大谷長編『キェルケゴール著作全集』第10巻（共訳、創言社）他。

その他特に、キェルケゴールとポスト・キェルケゴール、現代北欧の哲学的諸問題（価値ニヒリズム・医療・環境など）に関する論文多数。

明治大学人文科学研究所叢書

北欧神話・宇宙論の基礎構造

——『巫女の予言』の秘文を解く——

一九九四年 五月三〇日 第一刷発行

著者 尾崎和彦

発行者 相田 昭

発行所 株式会社白鳳社

東京都千代田区神田神保町一―二〇

電話（〇三）三二九一―七五七一

振替〇〇一八〇一七―九二二四一

印刷 星野精版印刷株式会社

製本 協栄製本株式会社

落丁・乱丁本はお取り替えます。

ISBN4-8262-0077-3 C1014

はじめに——課題と方法

北欧人の精神生活を根源的、普遍的に規定し支配したのはいかなる「夢」、いかなる「感情」、いかなる「思惟」であつたのか、さらにこれらのものは外部からのいかなる影響、そしていかなる内部反応のもとに発生したのか、またそれらはどのような形で表現されたか、別言すれば真実「北欧的」と称しうる彼ら固有の世界観は、古代・中世という時代にどのような内容を展開したのか、勝義において本書が課題とするのはこのような問いに可能なかぎり精密に答えることである。

この目的を達成するために、筆者は、古代・中世北欧人の——異教的——世界観を最も集約的に開示している『古エッダ』に、中でもこの世界観の最も明晰判明な表出たる、『古エッダ』冒頭の詩篇『巫女の予言』に向かうことにした。

『巫女の予言』の基本的モチーフは「創成」「没落」「再生」であり、したがって類概念の立場から「宇宙創成論」(Kosmogoni)と「宇宙形態論」(Kosmograft)を種概念として包摂する「宇宙論」(Kosmologi)と、同じ類——種関係の立場で「没落論」と「再生論」を包括する「終末論」(Eskatologi)の二つの世界観的問題領域を有している。そして、『巫女の予言』の詩人の関心は決定的にあとの領域に置かれており、この詩篇全体が終

末論の様相をたたえているが、本書の主眼点は、もっぱらこの終末論によって無制約的に前提されている古代・中世スカンディナヴィア人の宇宙論的構想力の徹底分析にある。特に、筆者は、本書第二章において、この詩篇第2節に登場する三個の宇宙論的、宇宙形態論的概念——「九つの世界」「九つの根」「計りの樹」——の分析・検討に最大限意を用いつつ明晰判明な定義を試み、最後に、暫定的ながら「原北欧的コスモグラフィ」の再構築に挑戦した。

こういった課題を果たすための方法論上の際立った特質としては次の四点が挙げられる。

まず、第一章の二において、『巫女の予言』全詩節の原文を紹介し、さらに翻訳に加えて精密な注解を施したことである。しかも、その際筆者は『巫女の予言』研究史上最も定評のある注釈書数種類を駆使して作業を行なった結果、本書のこの注解によって、不十分ながら、これまでの『巫女の予言』理解の概要と方向の認識がほぼ可能になったのではないかと思われる。

次に、第二章、第三章において『巫女の予言』のコスモグラフィとコスモゴニーを論究する際、常に北欧神話研究史を念頭に置きつつ、さまざまな研究者との対話・対決を通して結論に導くという仕方での作業を進めたことである。これによって筆者独自の解釈を展開する余地がせめられた反面、恣意的解釈に走る危険を免れると同時に、今後の北欧神話研究に向かってより広い展望を開くことができたと考えている。

なおまた、第二章の六において本書の主要課題たる「原北欧的コスモグラフィ」の再建を試みる際、「九つの世界」のそれぞれの有する固有の性格を分析・抽出しつつ、さらにこれらを「月相」の媒介する時間表象と「方位」の有する空間表象とに接合することによって、そこから各世界の宇宙空間における位置を推測・策定するという方法をとったことである。この方法は是非と成否のいかんは読者の方々の判断に委ねるほかはないが、筆者が知るかぎりでは、このような手法によって北欧神話の宇宙論を考察した例は研究史上例がなく、筆者のそ

れが最初の試みである。⁽¹⁾

最後に、北歐神話の世界像を特徴づけているキーワードを語源学 (Etymologi) の視点から個々に吟味するという概念分析の方法の採用によって、考察全体の学的な厳密化・精密化を図ったことである。もとより筆者も神話研究における語源学的手法が極めて有力な武器たりうる反面、また多くの曖昧さ・不正確さといった看過しえない疑点をも残していることは十分承知してはいるものの、先人たちの真摯な営為によって築かれたゲルマン神話研究の大方の伝統にならない、かつ負いつつ、この語源学的概念分析の方法を本書の課題遂行上の主要な手段として用いたことをお断りしておかなければならない。

なお、第三章は、第二章で構想された「原北歐的コスモグラフィ」を踏まえながら、特に『巫女の予言』第3節、第7節、第8節の分析・検討を通して、古代北歐人固有の「宇宙創成論」―「コスモゴニー」の輪郭と特質を確認しようとしたものである。

さらに、第三章の結論からも鮮明になるように、北歐神話の場合、人間創成論の行き着く先が必然的に宇宙の破滅論に連なり、むしろ『巫女の予言』の視界から言えば、宇宙論は一直線に終末論、そして再生論に帰結することを無制約的に予想し、前提としていると言つてさしつかえないであろう。しかし、本書ではこの名にし負う終末論―「ラグナロク論」―にまで立ち入ることはできず、わずかに十九世紀以降本格化するラグナロク論の研究のうち初期の若干のものにかぎって、それらを貫く共通の、だが最も根源的な問題意識の一つを摘出・紹介するにとどまった。ただし、筆者としては、北歐的世界観の原像を探る上でエッダ神話の終末論そのものの考察の決定的意義についてはいかに言を尽くしても足りないものの、同時にまたこの北歐神話終末論をめぐるさまざまな論議の過程を整理して精密な学的認識をもたらすことも、前者に劣らず重要な意義を有するものと考えている。本書附録は、このような意味で筆者の思量する「ラグナロク神話論史」の一端である。宇宙論本来の主題

とはいささか隔絶しているかの感があるが、むしろ同主題のより突っ込んだ理解に資する目的で載録した。諒とされたい。

しかしながら、筆者としては、自分の意図がどうであれ、本書があくまで「試論」にとどまるものであることを十分に認識している。むしろ単なる「私論」と呼ぶべきかもしれない。この上は、読者各位の忌憚のないご批判を仰ぎながら一歩なりとも前進できれば幸いと考えている。

本書が原北欧精神の基底を掘鑿しようとする試みであるとすれば、同じ精神の現代的な展相を十九、二十世紀北欧思想史の中に辿ったのが、本書とほぼ同時に発刊されるはずの『北欧思想の水脈——単独者・福祉・信仰——知論争』（世界書院、一九九四年）である。併せてご叱正を賜れば幸いである。

目 次

はじめに——課題と方法……………Ⅰ

第一章『巫女の予言』の問題……………Ⅱ

一『巫女の予言』の周辺……………12

1 北欧神話における『巫女の予言』の位置……………12

2 『巫女の予言』成立の時代と場所およびその著者……………18

3 『巫女の予言』の題名・内容・構成……………21

二『巫女の予言』の原詩・翻訳・注解……………28

1 導入部……………28

2 過去……………31

3 現在……………85

4 未来……………88

第二章『巫女の予言』の宇宙形態論……………129

一『巫女の予言』と宇宙形態論……………130

1 『巫女の予言』の宇宙形態論の特質……………130

2 宇宙形態論・宇宙創成論・終末論

132

二 「九つの世界」

134

1 「heimr」（ヘイム）の原義と「九つの世界」

134

2 「九つの世界」の理念の原流とその具体像

138

3 「九つの世界」の成立要件

149

4 「九つの世界」の宇宙空間における位置づけについて

162

三 「九つの根」

165

1 「nū ivið」（ニーウ・イーヴィジ）をめぐる諸解釈

165

2 「九つの根」としての定義

173

四 「計りの樹」

177

1 「mjötvör」（ミョートヴィズ）の概念をめぐる問題

177

2 デ・ボアアの指摘

180

3 ノルダルの「mjötvör」解釈

182

4 オールセンの「mjötvör」解釈

186

5 グリムの「mjötvör」解釈

189

6 ペターセンとジムロックの「mjötvör」解釈

194

7 ブッゲとミュレンホフの「mjötvör」解釈

198

8 ピッピンクの「mjötvör」解釈 205

9 マイヤーの「mjötvör」解釈 211

10 「mjötvör」概念の最終的吟味と定義 213

五 論争問題としての『巫女の予言』第2節 224

1 『巫女の予言』第2節をめぐる論争 224

2 マイスナーにおける第2節問題 227

3 ランケにおける第2節問題 228

4 エーツマンにおける第2節問題 230

5 ヤコブセンにおける第2節問題 233

六 『巫女の予言』のコスモグラフィ―再構築の試み 236

1 「世界樹」と価値論的「方位」規定

——トポロフの所論を中心に——

236

2 「9」の数の神秘主義 246

3 二つの世界の位置策定の試み

——「ミズガルズ」「アーサ Heim」

274

4 「九つの根」再考 286

5 「方位」の神話的规定 295

6 「方位」の質的规定と「世界」の位置 316

第三章 『巫女の予言』の宇宙創成論

.....

357

一 二つの宇宙創成神話 358

1 北欧宇宙創成神話の特異性 358

2 スノリの宇宙創成神話 359

3 『巫女の予言』の宇宙創成神話の特性 362

二 「ギンヌンガガブ」——北欧的「無」の概念 366

1 北欧コスモゴニーの原点 366

2 「カオス」か「空無」か？ 370

三 「ユミル」と「大地」創成の問題 377

1 「ユミル」と『巫女の予言』の宇宙創成論 377

2 『巫女の予言』にとつての「大地」創成 381

四 創成の神々と人類の始祖 384

1 創成の神々 384

2 人間の創成 392

付 論 初期ラグナロク神話論の基本的視座 …………… 405

——「異教的唯一神」の問題——

はじめに 406

1 ハムメリックのラグナロク神話論以前 408

2 ハムメリックのラグナロク神話論 420

3 ハムメリックのラグナロク神話論以後 436

おわりに 448

注 453

あとがき 539

北欧神話研究のための資料と文献 xii

索引 i

装 幀 田 淵 裕 一

第一章 『巫女の予言』の問題

一 『巫女の予言』の周辺

1 北欧神話における『巫女の予言』の位置

いわゆる「北欧神話」の世界を開示する原資料としては普通『古エッダ』と『新エッダ』が挙げられる。なお前者については内容の高度に韻文的な性格と、またその発見者と誤解された人物の名から『詩のエッダ』『セームンドのエッダ』とも称せられ、さらに後者は『詩のエッダ』との対比で『散文のエッダ』、執筆者名にちなんで『スノリのエッダ』と呼ばれる。さらに前者には『王室写本』(Codex Regius 写本番号 2365, 4^o)と『アルナマグネアン写本』(Codex Arnamagnæanus 写本番号 748, 4^o)という二種類の写本がある。ただし、後者は不完全な断片から成り立っている。また一二二〇年頃、アイスランドの歴史家・詩人スノリ・ストウルルソン(Snorri Sturluson, 1178-1241)によつて執筆された『散文のエッダ』の主要な写本としては四種類⁽¹⁾のものがあ⁽¹⁾る。そしてこのエッダは『ギルヴィの欺き』『詩語法』『韻律一覧』の三部から構成されている。

十三世紀にアイスランド人が筆記したと思われる写本を、十七世紀に同国スカルホルトの司教ブリュニョーヴル・スヴェインソン(Brynjólfur Sveinsson, 1605-75)が発見し、一六六二年、デンマーク王フレゼリク三世

(在位一六四八―七〇)に献じられたところからその名が由来し、かつ『アルナマグネアン写本』に勝る重要性を有する『王室写本』は四十五葉の羊皮紙から成っており、十篇の神話詩と十九篇の英雄詩を含んでいるが、現在の刊本では『散文のエッタ』や十七世紀以降の写本から内容的に近いものが付加されており、たとえばネッケルークーンの刊本⁽²⁾では三十二篇が数えられている。

『王室写本』に呼応して、『古エッタ』全体の内容も「神話詩」「英雄詩」「格言詩」の三つに区分するのが通例である。もっとも、「格言詩」は「神話詩」に組み入れられる場合があるが、『王室写本』に含まれている「神話詩」は本来次の十篇である。『巫女の予言』(Völuspá)、『高き者の言葉』(Hávamál)、『ヴァフスルーズニルの言葉』(Vafþrúðnismál)、『グリームニルの言葉』(Grímnismál)、『スキールニルの言葉』(Skírnismál)、『ハーバルズの歌』(Hárbarðsljóð)、『ユニルの歌』(Hymiskviða)、『ロキの口論』(Lokasenna)、『スリユムの歌』(Þrymskviða)、『アルヴィースの言葉』(Alvíssmál)。しかし、現在では慣例として上記のほか、次の四篇を加えて『古エッタ』の「神話詩」として扱われている。『バルドルの夢』(Balds Draumar)―別名『ヴェグタムの歌』(Vegtamskviða)、『リーグの歌』(Rígsþula)、『グロットエイの歌』(Grottaþingr)、『ヒュンドラの歌』(Hýndljóð)⁽³⁾。もっとも、いずれの詩篇を神話詩に数えるか、英雄詩に入れるかについては必ずしも統一見解はない。

なお各詩篇の作者は不明であり、成立した年代についても異論多く、たとえばフィンヌル・ヨーンソンは『高き者の言葉』を最古とする九〇〇年頃から『ヒュミルの歌』の書かれたと推測される一〇〇〇年頃までの約一世紀間を『古エッタ』の成立時期と想定しているが、何ら確証はない⁽⁴⁾。また成立した場所に関しても、ノルウェーかアイスランドのいずれかであろうと推定しうるだけである。

さて、以上のごとき北欧神話の原資料についての基本的事項を確認の上、本書におけるわれわれの主題「北欧

神話の宇宙論」の考察にとって基本的な資料となる『巫女の予言』自体に向かうことにしよう。この詩篇は、異同はあるものの『王室写本』と『ハウクスボーク』(Hauksbók。『アルナマグネアン写本コレクション』にも収録されている。写本番号 544.4。)の両写本に含まれており、また『新エッダ』の神話セクション『ギュルヴィの欺き』(Gylfaginning)の中にも『巫女の予言』はその主要な資料として縦横に利用されている。とはいえ、『巫女の予言』の詩節は『王室写本』では六十二、『ハウクスボーク』ではそれよりも少なく、五十九であることからわかるように、写本の段階でも一致していないし、また現代では編纂者・刊行者によっても異なる。ちなみにソーフス・ブッゲ版(一八六七)およびそれを規範として構成された現在最も使用されているヨン・ヘルガソン版(初版一九五一)やネットケルークン版(初版一九六二)では、『巫女の予言』の原型を復元しようとする試みの結果、六十六節に増幅されている。しかし、逆にカール・ミュレンホフは後代の挿入ないし混入と思われる節を整理して全体をわずか五十節に削減し、本書でわれわれの依拠しているシーグルズル・ノルダルの場合と同じ理由から五十六節にまとめられている。⁽⁵⁾しかも、各節の並べ方も研究者の『巫女の予言』の全体解釈の視点の違いによって必ずしも一定していない。とはいえ、詩節数の多寡・順列の異同は『巫女の予言』の全内容と構成の理解を左右するほどの決定的な意味をもつわけではなく、したがって『巫女の予言』の全体的構想を把握する上で、それぞれの刊本やそれに関する各研究者に見られる解釈の差にあまり拘泥する必要はない。

この『巫女の予言』詩篇全体の翻訳と注解は本章の二におけるわれわれの課題であり、本節ではそれに先立って『巫女の予言』が北欧神話の世界に占める位置ないし意義などについて、本章の二および第二章以下におけるわれわれの作業に必要なかぎりにおいて言及しておくことにする。

『巫女の予言』は『王室写本』の冒頭に据えられており、したがって当然また『古エッダ』の発端を飾る詩篇ということになるが、すでにこのことが北欧神話全体における『巫女の予言』の位置のいかなるものなるかを如